

■ 日本移民学会が、人間文化研究所との共催で開催されました。

2006年6月24日(土)と25日(日)の2日間にわたり、日本移民学会第16回年次大会が名古屋市立大学山の畑キャンパスの人文社会学部棟を会場として開催された。ちなみに中部地方でこの学会が開催されるのは、今回がはじめてである。今回の大会は人間文化研究所との共催というかたちで開催されたという意味で、本学部および本研究所の知名度を上げることに多少なりとも貢献できたのではと思っている。

大会第1日には開催校企画としてシンポジウム「地域における外国籍住民との共生をめざして」が201教室において開催された。周知のように東海地方には愛知県を始めとしてニューカマーと呼ばれる日系人労働者の集住地域が多数存在し、名古屋市中区の栄東地区には西日本随一のフィリピン人集住地域が存在している。このような意味で「外国人住民との共生」をテーマとしたのは、まさに時宜を得たものであったと思われる。冒頭に本シンポジウムの趣旨説明を村井忠政(名古屋市立大学)がおこない、ついで報告者の発表に移った。第1報告者の山本かほり氏(愛知県立大学)は「愛知県西尾市における外国籍住民の増加と地域再編」の標題で、西尾市の公団住宅における日系ブラジル人と地域住民との共生の取り組みについて、現地調査にもとづく報告をし、第2報告者の高畑幸氏(広島国際学院大学)は、西日本最大のフィリピン人集住地域である名古屋市中区の栄東地区(この地区は「女子大小路」あるいは「栄ウオーク街」の名で知られる繁華街であり、多くのフィリピン・パブが隣接している)におけるフィリピン人と地域住民との共生の取り組みについて報告した。両報告とも地域社会における外国籍住民との共生が比較的 successful している事例の報告であったが、成功の原因はどこにあったかを長年の現地調査の成果にもとづいた詳細な分析により明らかにした。これらの報告に続いて、2名の研究者によるコメント



がなされた。第1コメンテーターの山口博史氏(名古屋大学)は日系ブラジル人集住地域として知られる三重県鈴鹿市における多文化共生の実態を報告し、第2コメンテーターの菊地夏野氏(名古屋市立大学)はジェンダー論的視角から名古屋市におけるフィリピン人女性をめぐる諸問題(日本人配偶者によるDV、人身売買など)について問題提起をした。最後にフロアーから活発な質問が多数寄せられ、これに対する報告者の回答がなされ、閉会となった。会場には会員以外にも地元のNPO関係者などが多数参加し、会場はほぼ満席で盛会であったことを申しそえておきたい。

大会第2日には、「グローバリゼーションと移民—国境を越える移民と市民権—」のテーマでシンポジウムが開催された。冒頭の村川庸子氏(敬愛大学)の趣旨説明について江成幸氏(三重大学)が「政治化するメンバーシップ—合衆国メキシコ移民の労働・福祉・教育」、森千香子氏(南山大学)が「フランス移民問題の変容と『内なる敵』の表象—イスラーム、植民地主義、『暴動』」、浅川晃広氏(名古屋大学)が「日本への移民と日本国籍」のタイトルで、それぞれアメリカ、ヨーロッパ、日本の移民政策と市民権制度の現状と問題点について報告した。今回のシンポジウムの報告者はいずれも新進気鋭の若手研究者であり、それぞれの地域の移民政策・市民権制度の実態を、移民送出側と受入れ

側の両方を射程に入れた実証的研究にもとづいての報告であった。最近のイギリスでのテロ、フランスの移民第二世代の若者による暴動、現在アメリカ合衆国で極めてホットな政治的イシューとなっているメキシコからの不法移民排斥の動きなど、いずれの報告もいきいきとした臨場感あふれるものであった。これら移民(外国人労働者)によって引き起こされている問題が、世界的な移民(外国人労働者)排斥への傾きを加速し、多文化主義に対する懐疑や警戒を呼び起こす一因となっていることは疑う余地がない。外国人労働者がさまざまな形ですでに相当数受け入れられており、彼らの存在なしではわが国の産業が成り立たないという現実があるにもかかわらず、いまだ受け入れるか否かをめぐる議論に終始している日本にとって、これらの問題は対岸の火事として眺めていることはできない。将来日本が

外国人を本格的に移民として受け入れる際に、これらの海外での経験から学ぶものは決して少なくはないと思われる。

最後になったが、今回の大会開催に当たっては多くの方々のご協力をいただいた。これらの方々の献身的なお力添えなしには到底大会を成功裏に終えることができなかったことは言うまでもない。人間文化研究所員の山本明代先生をはじめとして、大学院の村井ゼミの皆さんにはこの紙面を借りて心から感謝申し上げたい。皆さん、本当にご苦労様でした。(人間文化研究所長 村井忠政)



懇親会では、名古屋市内在住のキューバ音楽グループ「ドス・キゼオス」による演奏も披露されました。

■ 異分野研究者の交流の場、マンデー・サロン

人間文化研究所では今年度から、人間文化研究科教員・院生の研究交流の場として、毎月第一月曜日にマンデー・サロンを開催しています。毎回、本研究科教員お一人から、近の研究成果について話題提供をいただいておりますが、参加者からは門外漢ゆえの素朴だけれど答えにくい質問や、異分野からの新鮮なコメントなどが出され、刺激的な研究交流が図られています。以下に、これまでのマンデー・サロンの様子をご紹介します。(以下の内容は、研究所 HP でも公開されています。随時更新していますので、HP もぜひご覧下さい。)

□ 第1回 マンデー・サロン 「和泉式部の亡霊」服部幸造教授 (2006年6月5日)



6月5日(月)に本学人間文化研究所にて、本研究科教員服部幸造氏による発表「和泉式部の亡霊」がなされた。参加者は本研究科教員・大学院生・修了者を含め20名近くもあり、本研究科の規模と月曜日の夕方という状況を考えると第1回目の「マンデー・サロン」に大きな関心が寄せられていることが伺われよう。

氏の発表は、和泉式部がその生前のイメージから中世における“亡霊”概念と重ね合わせられ、一種の信仰として畏敬の念をもって語り継がれていく様を、応仁の乱前後から戦国末期あたりまでの古典芸能や各種記録類を通じて新資料をも踏まえながら明らかにしたものであり、古典文学や芸能を通じて日本

文化の研究に長年の研鑽をつまれた氏の力量の確かさと学識の豊かさ、さらにはその巧みな話術もあいまって氏の講義が本学における“人気講義”であることを納得させるに十分な内容であった。

質疑応答においては、日本仏教史についての基礎的な知識から、当時の信仰の実態にいたるまで幅広いテーマが話題となった。

また、本研究科においてはいわゆる古典研究を専門とする教員は比較的少数であるが、氏の発表に他領域の教員・院生が触れることにより、古典研究の世界を垣間見ることができたのは有意義な点の一つであったと思われる。他領域間の、また公的私的なコミュニケーションの場としての“マンデー・サロン”のさらなる発展が望まれる所以である。

(人間文化研究科博士後期課程生 原口耕一郎)

□ 第2回 マンデー・サロン 「使えるヘーゲル」 福吉勝男教授 (2006年7月3日)

7月3日月曜日。第2回目の開催となった「マンデー・サロン」は、研究所の椅子が足りなくなるくらいに盛況ぶりであった。講師は福吉勝男教授。言わずと知れた、ヘーゲルをはじめとしたドイツ哲学の専門家である。つい最近平凡社新書より刊行された著書『使えるヘーゲル 社会のかたち、福祉の思想』について直々に話が聴けるとあって、多くの教員、院生らがこの本を片手に半ば興奮気味に集まってきた。



実際には、福吉教授の話はこの本の単なる内容紹介というよりも、それを今後さらに発展させ、展開するうえでのラフスケッチを示すことを中心に進められた。題して「現代の〈公共哲学〉とヘーゲル」。ヘーゲルの市民社会論に公共圏を見出し、現代の公共性をめぐる一連の議論、あるいはトクヴィル、アーレント、ハーバマスといった思想家のそれと比較を試みた興味深い内容である。「この発見が一体どう活かされるのか？」表現は様々であったものの、参加者からの質問はこの一点に集中したように思われる。

これに対して提示された答えは、「〈市場—公共〉リンク市民社会論」という全く新しい概念であった。その中身は明確には示されなかったが、誰もが自分の手でそれを探り出したいくなるような誘惑にかられていたことだけはたしかである。ヘーゲルへの誘い。福吉教授の意図は実はそこにあったのかもしれない…。

(人間文化研究科博士後期課程生 小川仁志)

□ 第3回 マンデー・サロン 「古代の民衆像を再考する」吉田一彦教授 (2006年10月2日)

月に一度、第1月曜日に開催される「マンデー・サロン」も3回目となった。今回は吉田一彦教授を講師に「古代の民衆像を再考する」と題しての講義である。

「民衆の古代史—『日本霊異記』に見るもう一つの古代」のタイトルで、著書が風媒社から刊行されたのはこの4月のこと。「ストレスがたまると原稿が進むんですよ」という教授の話は、「日本霊異記」から始まった。遭難した漁民、勝手に出家した私度僧、強欲な金貸しなど市井に生きる人々の暮らしぶりが生きいきと描かれている日本最古の仏教説話集である。かつてはただのものがたりだと思われていたこれらだが、幾多の木簡の出土や遺跡の発掘によって、信頼に足る史料だと吉田教授は確信したという。「山川出版の日本史にはたしか『律令国家の成立』という章立てがありますよね」との問いかけに深く頷く参加者たち。

「律令国家」とは、古代国家の一形態で、律令を統治の基本法典としたもの。巨大な官人群を擁し、人民に班田収受によって一定面積の耕地を保障する代わりに、戸籍につけて租・庸・調・雑徭など物納租税や徭役労働を課し、個人人身支配を徹底した。日本では隋・唐に習って7世紀半ばから形成され、奈良時代を最盛期とし、平安初期の10世紀頃まで続いた。

(広辞苑より)

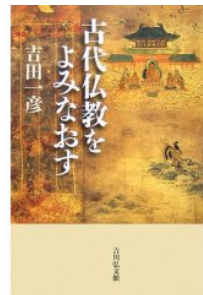
「日本霊異記」に記される古代社会の実態は、律令の定める国家の姿とは大きく異なっていることをどう説明したらよいのだろうかと教授は続ける。まずは古代国家が「法に基づく国家」なのかどうかを再考すべきであり、「法の支配ではなく、人(天皇)の支配に基づく国家」ではなかったかと吉田説が展開する。古代史パラダイムの転換である。

つい先日、島根で平安初期の「唐風女性像」の板絵が発掘された。千年以上も埋もれていたタイムカプセルからはどんなメッセージが読み解かれるのだろうか。まったくの初心者想像力をかかも刺激する、スリリングで贅沢な時間をいただいた。次回「マンデー・サロン」の開催が待たれるところである。

(人間文化研究科博士前期課程生 重原厚子)

◆ 新刊本案内 ◆

(2006年7月~9月)



・吉田一彦

(人間文化研究科教授) 著

『古代仏教をよみなおす』

吉川弘文館、2006年9月

刊、3570円

(↓著者による本の紹介)

「日本の古代仏教とその歴史をどのように理解するか。史実を伝えるとされてきた史料を再検討し、また新たな論点や研究視角を設定して、これまでとは異なる新しい古代仏教史像を再構築しようと試みる本をまとめました。冒頭の「古代仏教史再考—総論—」で全体像を構想し、続く各論で、天皇号と日本国の誕生、聖徳太子の問題、『日本書紀』の仏教関係記事の評価、行基の実像、神仏習合の理解、女性の仏教信仰の問題などについて考えてみました。年来の主張を一般向きに発信した書物となりました。」

リレーエッセイ 人間・地域・共生

第6回「オカリナ人生」 加藤 いつみ（人間文化研究科教授）

今年は、オカリナを抱えて2回も海外に飛ぶチャンスに恵まれた。たまたま偶然に手にした楽器にこんなにもめり込むとは、当初は想像もしなかった。

私は、30年程前から、海外でのリコーダーのワークショップによく出かけた。そこでの昼休み、老若男女が一緒になって楽しそうに吹いている様子を目にし、“こんな活動を日本でしたいなー”と羨望の気持ちで眺めていた。ちょうどそんな時期、宗次郎の名と共にオカリナが登場してきた。私もその普及の波に乗って、1989年頃から活動を始めた。

1990年頃からグループが全国各地に生まれ、現在、500以上グループが存在し、中高年者の楽しみの楽器として、その地位を築いてきた。日本での学習者の特徴は、その70%以上がオカリナの持つ音色の優しさに惹かれて学習をはじめていること、男性は60代、女性は50代と、一定の勤めを果たした人々によって楽しまれていることである。

韓国でも日本の影響を受けて2000年頃から普及し始めた。ここでは、まず“音楽院”と呼ばれる音楽教室の中で子どものためのオカリナコースがスタートした。それと同時に子ども達を指導するための指導者の養成が計られた。音楽教室で始まった



学習は、今では小学校の音楽の時間に取り入れられ、我々が見学させてもらった2つの小学校では、上級生がプラスチックの楽器を使って、見事な演奏をしていた。日本の学校教育と比較して、その信じられないようなパワーと普及の速さには脅威すら感じた。

両国の学習の実態はともかく、今日我々が求めている生活において〈豊かさ喜び〉を見出すためにも、学校教育が求める〈豊かな感性・創造力〉などの育成にとってもオカリナの果たす役割がいつそう求められるのではなからうか、と考える今日である。

■ 研究所 information * 詳細は変更されることがあります。最新情報は人間文化研究所ホームページにてお知らせします。

① 講演会「歴史・文化・自然を活かしたまちづくりと観光」

日時:2006年12月16日(土) 13:30~16:30

会場:名古屋市立大学人文社会学部棟 201教室

講師:西村幸夫氏(東京大学大学院工学系研究科教授/都市工学専攻)

* 講師の西村幸夫教授は、2004年に『都市保全計画』という1000ページを超える大著を出され、都市景観・まちづくり研究の第一人者として、国内外で活躍されています。

コメンテーター:服部幸造・吉田一彦

(ともに本学人間文化研究科教授)

参加費:無料 事前申し込みなしに参加いただけます。

お問い合わせ先:名古屋市立大学大学院人間文化研究科・山田明研究室(tel:052-872-5176)

主催:名古屋市立大学人間文化研究所共同研究プロジェクト「名古屋の環境・文化・まちづくりと観光に関する学際的研究」

<名古屋市立大学特別奨励研究費採択事業>

(予告情報)

② シンポジウム「越境文学の現況をめぐって(仮題)」

日時:2006年12月16日(土) 13:30~18:30

場所:名古屋市立大学人文社会学部棟 1階会議室

パネラー:

沼野充義氏(東京大学大学院人文社会学系研究科教授)

今福龍太氏(東京外国語大学大学院地域文化研究科教授)

西成彦氏(立命館大学大学院先端総合学術研究科教授)

管啓次郎氏(翻訳家、エッセイスト)

司会・報告: 土屋勝彦(本学人間文化研究科教授)

参加費:無料

主催:名古屋市立大学人間文化研究所共同研究プロジェクト「越境する文学の総合的研究」

<科学研究費補助金基盤研究費(B)採択>

編集後記 先日、滋賀県の琵琶湖博物館へ行ってきました。以前から「面白い博物館だ」という評判は聞いていたのですが、例の滋賀県新知事が以前在籍していたと聞き、今回足を運ぶ気になりました。来館者の関心を喚起する展示物や展示方法にあふれ、琵琶湖と人間の生活との深い関わりの歴史を興味深く学ぶことができます。生物や植物の標本に目を輝かせる子どもの姿が印象的でした。研究活動を充実させつつ、博物館を地域の学びと交流の場と位置づけて可能性を上げようとする、関係者の強い意欲と誠実な姿勢を感じました。(S)

名古屋市立大学
人間文化研究所